



## <資料>貨幣の価値 : リーフマン『貨幣と金』第六章 続き(2)

リーフマン[著]  
谷田, 義一(譯)

---

(Citation)

経済學商業學國民經濟雜誌, 34(1):147-156

(Issue Date)

1923-01

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053517>



# 貨幣の價值 (其二)

(リーフマン『貨幣と金』第六章續き)

谷 田 義 一

## 二 金屬主義

クナップによりて光彩を放つて利用せられたる貨幣史上の經驗に據り、其後また戰時に於ける觀察に據りても、從來無條件に行はれたる貨幣價值に關する見解、即ち金屬主義の見解が益々動搖したことは疑を容れぬ所である。一派の經濟學者中、殊に理論上に於て確固たる基礎を缺除して居る者は貨幣論上に於ける金屬主義を全然否認したのであるが、而も經濟理論全體が支離滅裂なるために彼等は金屬主義に代へて他に何物をも置くことが出来ない。斯くてクナップの貨幣國定説は成立したのであるが名目主義の經濟的理論附は尙ほ缺除して居るのである。

他面に於て金屬主義は、其の主要點に於て久しき以前より陳腐に來したるもまた再び元の地位に引上げられた所の一般經濟理論に立脚して居る。金屬主義貨幣理論と客觀價值學説、即ち生産費學説は密接なる關係に立つて居る。前者は單に後者を以て理論附けられる。併し財の價值が其の生産費によりて定めらるると言ふ學説に根據するの勇氣を持つて居るものは最早極めて少數であるが、眞正なる價格理論が缺除して居るために、何人と雖も眞に此の學説から脱却しては居らぬのである。

即ち貨幣の價值も亦た金の價值により決定せられ、金の價值は其の生産費によりて決定せらるること  
なす(尙ほ最近デキールは之である)。金屬主義貨幣理論は完全なる貨幣とは單に其の價值をその素  
材に保持することの見解から出發して居るのである。從て國家の鑄造は貨幣箇片の重量と純分とを證  
明するの目的を持つて居るに外ならぬ(レキシス)。此の見解に從へば紙幣及び補助貨等は單に貨幣  
代用具若しくは貨幣代用物であつて、交換取引に於ける其の價值は眞の貨幣に兌換せらるること及  
び發行者の兌換能力に關する信用に依繫するものであるとせられる。總ての非金屬的支拂用具は最  
も不明瞭なる信用の概念に押込められて貨幣の概念は價值ある金屬貨幣に限られて居る。之れに據  
れば今日貨幣は金に對する關係によりてのみ其の價值を保有する。單に一般的の嗜好素材より成立  
し、然らざれば斯くの如き素材により呼稱せられ、之に兌換せらるる場合に於てのみ貨幣は通説に  
從て價值尺度としての職能を遂すことが出来る。而して此の貨幣職能が一般交換用具及び支拂用具  
としての職能と單に結合し之を貨幣と爲すのである(フキリッポヅキッチ)。銀行券補助貨等は交換  
用具及び支拂用具としては役立つ。きも價值尺度としては役立つことこの出来ない單なる貨幣代用物  
である。

さて曩に説明したるが如く全く自から價值を保有しない貨幣、即ち素材的に無價值なる貨幣が價  
値尺度若しくは最近デキールの唱道するが如く(ペンダイクセンの著述たる「本位政策と貨幣理論」の  
批評に於て Bankers, 10. Jahrgang, Nr. 1.) 價值比較  
用具或は價格確定用具として不可能であると信ずるは根本的の誤謬であり、全貨幣機制を全然閑却  
せるものである。之れ果して絶對價值、即ち素材價值の古き概念に非らずして何ぞや。今日尙ほ費  
用財としての貨幣の概念、即ち貨幣の内部經濟的職能の概念、從つて貨幣も亦た其の素材のために  
非らずして、單に其れにより調達し得る享樂、財のために評價せられると言ふ思想が常に排除して

居る。—之れ常に學者の技術的、唯物的、社會的、國民經濟的考察であるためである— 而して吾人は貨幣を以て一切の享樂財を調達することを得るが故に、貨幣は之が成立して居る所の素材を全然顧慮することなく評價せられるのである。

デイルが更に『若し貨幣が價值比較用具であるとすれば、tertium Comparationis が除外して居る場合に於て、吾人は如何にして價值を比較することが出来るのであるか』と設問すれば、之に對して『心理的に利用と費用とを比較することに對しては tertium Comparationis は必要では無し』と言ふことが出来るのである。—併し貨幣は費用單位、即ち個人的費用評價の公分母である。總ての價格と所得とが之れに於て計算せらるるが故に個人の利用及費用比較の公分母となる所のものは物的貨幣では無くまた貴金屬から造られたる貨幣でもなく、其れは一般的計算單位である（貨幣は決して tertium Comparationis では無い。價格の比較に當つて而も貨幣はそれ自身に價格であり價格を表現する唯一の手段なるが故に之れではない。利用及費用の比較に當つて貨幣は之れ自身に費用財であり假令究極の費用でなく言はゞ單に準費用であるとしても費用として評價せらるるが故に之れではない。單に貨幣の長所とする所は其れが單位的費用要素—他の何物も公分母なる名稱を表示すべきものではない—であり、從つて吾人は費用要素としての勞働の苦痛に反して貨幣に於ては嚴密なる既知の蓄積より出發することが出来るのであつて、從つて其の各單位は所得分に應じて均しく評價せられる。之れ貨幣の内部經濟的意義である）。

而して最後にペンデイクセンが貨幣は之れ自身に何等價值を保有せないのであるが單に他の商品の價值を表現するのみであると言つて居るのは確かに甚だしき不十分である。併しデイルが之れに對して『然らば吾人は詰問せむに、貨幣を以て如何なる財が想像せられるのであるか。吾人は貨幣によりて衣服、自轉車、棉花、靴擦等を持つことが出来る。總て此等の價值は貨幣の價值に反映せられねばならぬ筈ではないか』と指摘する時に果して吾人は之に對して何と言ふべきであらうか即ち第二十世紀の今日、獨逸の最も著明なる一經濟學者（デイル）は之れに關してこれ以上に論

議することは全く無用であると絶叫して居る。所が一度交換經濟的機制に就き思ひ到る者に取つては貨幣の價值が事實に於て總ての價格を反射することは自明なる所である——之れ單に正常なる價格理論のみを以て説明附けられるのであるが——。蓋し貨幣を通じて一切の價格、一切の財は關係的に存在して居ると言ふ主張は殊に最近に到り初めて若干の經濟學者によりて認識せられたる所の動かすことの出来ない事實であるからである。實にデール及び從來の學說の如くに價格を一定の財の量であると定義して各財の價格は其の生産費によりて決定せらるることを信じて居る者は一切の價格の相關關係に就いて想も寄らぬのは當然なることである。併し假令其れを明かにすることが出来なくとも少くとも此の事實を認識することは交換經濟的機制に關して相當満足の行く概念を保有するの根本的前提となるのである。吾人は經濟的理論に於て尙ほ未熟である。而してデールも未だ一般的理論問題に於て眞面目に努力して居る一經濟學者である。

唯物的貨幣見解の詳細なる反駁は敢て此の場合に必要ではない。斯る見解は唯物的貨幣觀を以ては説明附くることの出来ない歴史上の實例により實際的に否定せられて居る。唯物的貨幣觀の實質價值に關する基本的見解は自餘の點に於ては未だ唯物的貨幣觀を全く脱却して居らぬ學者さへも認むる所の誤謬である(ヘッフエリヒ)。且つ貨幣の價值を所謂生産費によつて説明附けむとするはデールも亦た代表して居る所の意見であるが到底眞面目に論議せらるべきものではない。蓋し自由鑄造の制度に於ては或る程度まで金に對する需要は無制限に存在して居つて、従つて從來の價格理論の好適なるが如くに其の需要を確定的大サと認むることは出来ないで次の問題が起る。即ち生産費の増加に伴ふて生産は明らかに増加せられることが出来るものであれば、何故に尙ほ多くの金が生産せられないのであるか。此の場合に於ても他の場合に於けるが如く價格が先づ生産費を決定

するものなるが故に生産費が投せらるると言ふことは、吾人が従來の理論により盲從して居らぬ限りは之を認識することは困難ではない（金の價格も亦た總ての價格の如く單に交換經濟的限界收益の概念によりてのみ説明せられる。此の價格は之れによりて其他一切の財に關係して居るのである之れに關する詳細は第七章に在る）。

金屬主義貨幣理論に對する駁論は本書の全體を通じて與えられる。苟しくも理知ある人に取つては此の駁論は詳細なる考察を行へば自から明かなる所であつて彼の貨幣に於て十分なる實際的洞察を保持せる多くの人、例へばヘルフェリヒ、ランズブルヒ其他が正當なる一般的理論的基調の缺除して居るために尙ほ部分的に金屬主義を固持せることは只管惜しむべき所である。故に茲に數言を費して金屬主義論を穿鑿しよう。金屬主義を批評するために最近の一金屬論者、殊に金屬論者中頗る所論の巧なる代表者としてランズブルヒ『戰時賠償金と其の資源』（Die Kriegskosten und ihre Quellen）（出版年の記載なし。一九一六年發行）を選ばう。彼は「戰時賠償金と貨幣理論」の章に於て（五十二頁）言つて居る。金屬主義理論は其れが然らざるべからざるが如く貨幣とは其の名目價值が有效價值に一致して居る金屬によりて造られて居る所の支拂用具であるとなすものである云々と。即ち此の場合に於ては有效價值なる語字を以て幼稚なる感じから、衣を着せた古い絶對價值の誤謬を繰返して居るのである。之れに對して章券學說とは貨幣は貨幣として通常構成せられまた常態に於て多くは其れが兌換せられ得る所の金屬と必然的に結合して居ることを必要とせないものであつて、貨幣と金屬との關係は之れを缺除しても可なりとするの立場に立脚し、寧ろ支拂用具を以て貨幣たらしめむがためには、國家命令に據り之れに一定の價值が賦與せらるるを以つて足り、自餘の點に於ては貨幣は如何様にも造出せられることが出来るとなすものである。今、斯様に章券學說を特色附けることに對しては既にオットー・ハインは其れは恐らくはクナツプ及び彼が祖

述者の或る者の學說には當嵌るが必ずしも名目貨幣理論全體に當嵌るものではないと抗論して居るのである (Zur Verteidigung der Chartaltheorie des Geldes, a. a. O. S. 778)。余はオットー・ハインが紙幣は有効にして且つ國家は可及的之れを高價に賣出さむとなすを理論附くる様なことには賛成出来ないが、彼が紙幣は必ずしも、其の購買力を國家より享受するのではなく、其れ自からに於て之れを獲得するものなることを強調して居るのは正當である(前記參照)。ランズブルヒは一派名目論者中、國家は其の造出し法認する支拂用具に名目價值の外また一種の實際價值、即ち一定の積極的な購買力をも賦與することが出来るとの誤りたる見解に従はない者に對しては少しも攻撃の鋒を向けては居らない。而して章券學說の眞の内容を形成する假定は彼の主張するが如く貨幣本質の自己顯著と根本的閑却に基いて居る。然るにランズブルヒは其の他の名目主義基礎附には毫も對抗を試みて居るのではない。今、余はクナツプの如く全く經濟的理論附を企てないか或は其れを以ては理論附くることの出来ない數量的、唯物的、經濟理論によつて樹立せむとする從來の章券學說を辯護せむとするものでは決してない。從來の名目主義者は金屬主義の不可能なるを十分に證明すべき材料を齎せるに拘らず、明確なる理論的體系によりて之れに代ることもなく、また名目主義を理論的に基礎附くることもしなかつた。此の二つのことは共に心理的基礎に立つ所の鍊磨せられたる理論的基礎に於てのみ可能なる所である。

從來の名目主義貨幣學說には斯くの如き缺點あるがためにオットー・ハインも亦たランズブルヒが自から金屬主義を理論附けむと企てたる著作中の章句に毫も對抗することが出来なかつた。換言すればオットー・ハインは章券學說の辯護のみを事としたのであるが經濟理論の根據によりて金屬學說を攻撃することが出来なかつた。ランズブルヒは言ふ「若し國家が新に貨幣の種類を造出し、而

も同時に其の本位を價值動搖に對して保全せむと欲せば、國家は新支拂用具を歴史的の所産たる貨幣制度の内に編入して、之れに法律、若しくは命令により舊支拂用具の名目價值を賦與するを以ては十分であるとせられない。其の國の本位制度に於ける新貨幣の碇著は極めて不堅固である。斯く賦與せられたる名目價值が有效價值となるためには第二の碇著が必要である。支拂用具―各財の價值(之れ慣例的數量的考察である)は他の財との交換關係によりて決定せらるるものであるから―は商業上重要なる諸國家に於て世界的交換財、即ち世界的價值尺度たる財その物と不可分離の結合をなさねばならぬ。此の世界貨幣たる性質を保持し維持せむとすれば支拂用具は如何なる事實の下に於ても世界的交換財より素材的に成立せねばならぬ。また支拂用具は各所有者に對して辛勞と猶豫なく世界的交換財の所有を達せしむるの能力を保證するの限りに於て、即ち其れが此の財に對する保證であり、取引上同財の代用を遂たす限りに於てまた此の性質を保持し維持して居る。兌換券は各個片毎に之れに相當する世界的交換財により準備せられねばならぬ。其他の場合に於ては支拂用具の交換蓋然性、從つて其の保全是或る程度まで保證せられて居ても價值の持續性が保證せられて居らない。

此等の見解は今日通説と稱することが出来るのであつて、之れに據れば兌換券に對して完全なる金準備が必要なることが認められる。併し他面に於て此等の見解は戰時の經驗によりて排撃せられたので、之れを尙ほ其の儘に襲用せむとすることは既に大なる理論拘泥であり盲目的なる金の崇拜に屬する。然るに瑞典、和蘭及アルデンラインに於ては金に對して單に代用を給すべき筈の銀行紙幣が金より大なる價值を得、より大なる購買力を保有したのである。金屬主義理論は七十年代に於ける塊太利の銀本位に對する同一關係を説明附くることの出来ない以上に此の事實を説附けること

が出来ないのは勿論である。埃太利の同一關係に對し後世に於ける金貨兌換の預望を顧慮して紙幣が『グルデン』銀貨の價值以上に騰貴したることを辯護するは勿論不正當である。

ランスブルヒが金本位の價值の持續性を大に強調し之れと同時に多數の金屬論者の見解に従へば物價騰貴は金生産の擴張により主として貨幣側より起るものとせられて居るのはまた不思議である。

最後にランスブルヒの所論に就いて最も疑はしきことは一體金の價值は何處より來るべきかの決定に就きて何等闡說する所の無いことである。若し其の價值が客觀的價值學說の意味に於て生産費より生ずるものとすれば、既に述べたるが如く何故にもつと多くの金が生産せられないのであるかの疑問が起る。また若し其れが主觀的價值學說の意味に就て之れを以て購買することの出來るものによつて定まるものとすれば、『第二の礎著』を必要とする理論附及び一般に金屬理論は既に無用に歸して居るのである。蓋し此の場合に於て何故に他の一般的交換財は金と同様に之れを以て購買する財の價值を獲得せないかが示されて居らぬからである。

之れを約言すれば、一般的經濟理論による金屬主義の眞の理論附がまた茲に缺けて居るのである。ランスブルヒは貨幣及び銀行の方面に於ける専門家であつて、貨幣理論を一般經濟理論より切離して樹立することが出來るものであると信じて居る。其れは上述せる所に據り明かであり、また本來自明である如く一の誤謬である。併し彼が其の貨幣理論に一般的なる理論的基礎を與ふることが出來なかつた點から彼に非難を加へることは出來ないのである。蓋し専門の理論家も亦た之れを與へることが出來なかつたのであつて、金屬主義の全體は多くの章券論者の學說の如く全く眞の理論的根據を缺いて居る單なる主張に外ならぬのである。

絶對的實質價值に關する概念は之れを度外視してもランヌブルヒの所説は既に曩に批判したるが如く全交換取引の基礎と、此の取引に於ける貨幣の職能とを閑却して居るのである。若し吾人が各財の價值は他の財との交換關係によりて定まること（單なる數量的考察が其の基礎をなして居るのではないが）、從つて貨幣とは單に給付と反對給付とを中介することの立脚點に立つ限りは、貨幣の素材的性質には何等關係する所なく、寧ろ如何なる目的物でも單に其れが總ての人によりて引受けられることが達せらるるだけで一般的交換用具としてこの職能を遂すことが出来るものと看做さねばならぬ。若し吾人が經濟に關し慣例的の技術的考察、價值との混同等より脱却するなれば一般的支拂用具が如何様にても、また如何なる形態に於ても、一度受領せられるに到る後は抽象的計算單位を以てするが如く、之によりて計算せられ國家的交換用具及び支拂用具は最早總ての取引を仲介するものでないことを洞察するに難くない。最後に吾人はまた財を購買するは全國民經濟に於ける貨幣單位でなく所得であり、而して一般計算單位及び其の表現たる價格と個人的欲望との關係は所得によりて齎らされるとの原則に到達する。經濟理論が貨幣の職能を眞に明かにせむとすれば、其の理論は如上の關係を解明せねばならぬ。

國家は價值關係に於て如何なることもなし得るのでないこと、即ち國家は其の造出する支拂用具に名目價值以外に實際價值、即ち一定の積極的購買力を賦與し得るものでないことは自明なる理である。然るに此の種の見解が主張せられ、抗争せられ、一般に説明せらるるは貨幣理論が尙ほ如何に低き地位に立つて居るのであるかを示して居るのである。國家は其の發行したる紙幣を若干『マルク』に通用せしめ（併し『マルク』が如何程に通用すべきかと云ふのではない）、計算單位に就て呼稱せらるる貨幣債務は其の貨幣によりて履行せられ、以て債權者を満足することを強制することが出来るとの事實は

オットー・ハインが之れに大なる重要を置き、またクナップ及び其の祖述者が更に大なる重要を置く所であるが吾人は決して此の事實を過重視することを許さない。蓋し此の法律は成程現存の貨幣債務に作用し、若し其の間に貨幣の購買が下落すれば債權者をして損害を受けたと感せしむるに到るのである。併し此の事實は貨幣數量に及ぼす國家の作用により所得の變動が起る時に徐々として變動して行く將來定めらるる價格には何等の影響を及ぼすものではない。

從來専ら貨幣と考へられた所のもの、即ち國家的若しくは國家によりて法認められたる支拂用具が財を購買するのではなくして、抽象的計算單位によりて計算せらるる所得が財を購買することを認むる時は、『第二の礎著』が一國の本位貨に與へられたる名目價值を有效價值たらしむるものではないことも洞察するに難からざる所である。戰時中瑞典に於ける關係は金屬主義的迷信に眩惑せられない者に最も明白に上述の理を指示するものである。茲に於て吾人は果して金の價值は何處より來るかの問題を最早避くることを要せない。而して金も亦一般的計算單位に對して單に一つの商品に過ぎないのであつて、其の價格が自由鑄造の制度によりて此の一般的計算單位に固定せられて居るが、併し其は一般的計算單位の主觀評價の變動と共に金の價值即ち他の財に對する金の交換關係も變動するを妨ぐるものでないことは茲に於て明かである。(未完)